退化する日本

友人の七回忌法要のなおらいで食べ切れない量の食事が出た。もったいないと思っていたら、容器に入れるから持って帰れ、飛行機の中で食べたらいいなどと言われ、断り切れなかった。釜飯に揚げ物、フルーツ、菓子などが手提げの紙袋がいっぱいになるまで詰め込まれた。

腹ははちきれそうに膨らんでいる。自宅に持ち返って食べる気にはならず、かといって捨てるのはあまりにも罪深い。さてどうしたものかと思案の挙句、路上生活者への差し入れを思いついた。

東京・新宿駅周辺でそれらしき人たちを探し回った。地下街でうつむき加減にたたずんでいた初老の男性に声をかけた。施しなど無用と怒られてはまずいので、相手のプライドを傷つけないように言葉を選んだ。

「あの、今晩は外でお泊りですか」

「何ですか」

気色ばんだ声が返ってきた。これはまずい。警戒心ありありだ。

「外でお泊りではないかと」

「だから、何なんですか」

「友人の法事でお土産に持たされた食事があるんですが、もらっていただけませんか」

ここまで話すと、男性の表情がぱっと明るくなった。

「ああ、そういうことですか。それは有り難い。仲間がいっぱいいるんだ。分けてやろう」

男性はそう言って持っていた紙袋を開けた。

七十歳だという。「これでも昔はばりばり仕事したもんだよ」。そう言う彼に年末から年始にかけて開設された年越し派遣村のことを話し、そこに来た相当数の人が生活保護申請を認められたことを教えた。

「いやあ、俺もそろそろ生活保護かなとは思っている」と彼は言った。

地下街では警備員が目を光らせていた。

「この辺もいづらいんでしょ」と水を向けると、「ああ。ちょっと立ち止まっていると、（警備員が）すぐ飛んでくるよ」ということだった。

構造的に生み出された行き場のない路上生活者を排除する社会。あのころと何も変わっていないと思った。

◇　◇

大学生だった二十五年ほど前、横浜市の寿（ことぶき）と呼ばれる簡易宿泊所（ドヤ）街で日雇い労働者組合が主催する年末年始の炊き出し活動に参加したことがある。仕事がなくなるこの時期、「一人の餓死者も凍死者も出さない」を合言葉に、炊き出し活動は「越冬闘争」と名づけられていた。

昼は雑炊を作り、夜はスープを入れた寸胴を持って野宿者の寝床を回る。あの時も野宿していた人々は素直に喜んでくれた。「うめえなあ」とスープをうまそうにする姿が思い出される。

越冬闘争の一日が終わると、テントの中で交流会が開かれ、なぜ野宿せざるを得ない人たちが存在するのか、組合の人たちの話を聴いた。日雇い労働者の街＝寄せ場とは相対的過剰人口をプールする場所であり、景気の調節弁として存在しているのだと。支援者たちはそれぞれ感じたことを述べ合った。

新宿の男性がそうであったように、寿で出会った人たちもさまざまな仕事をしてきた誇りを口にし、仲間を思いやる優しさがあった。

当時、寿周辺では野宿者が理由もなく襲われ、死傷する事件が続発していた。新聞は「浮浪者連続殺傷事件」という見出しで書き立てた。「浮浪者」という言葉がメディアではごく普通に使われていた。それぞれに人生があり、心優しくもある人たちを「浮浪者」と呼ぶマスコミに納得がいかなかった。

さすがに差別的な響きがあると反省したのか、新聞もテレビもいつのころからかホームレスという便利な言葉に言い換えるようになった。ホームレスにも差別的なニュアンスがあると指摘されると、ありのままに路上生活者という呼称が最近は定着したようだ。

一見すると、現在はメディアの人権感覚が向上したかのようにも思えるが、一方で当時はいなかった「ネットカフェ難民」が登場し、住所を持てない文字通りの難民が生み出される構造は二十五年前以上に強化されている。

当時、日雇い労働者は大半が建設業や港湾の荷役といった限定的な職種で働いていた。いまや景気の調節弁として使い捨てられる労働者は多種多様な職域に存在している。人間の生存基盤が退化・劣化する一方で、政権交代すらまともに起きないこの国の姿に、今さらながらがく然とする。

〈希〉